

「馬術」不毛の地での戦い

～競技力の上をいく何かを求めて～

高知県立幡多農業高等学校

小 山 創

1. はじめに

本校は清流四万十川の河口に位置し自然に囲まれた環境にある。本校には県下唯一の馬術部があり2008年夏に創部6年目にして念願であった全日本高等学校馬術競技大会の優勝旗を手にする事ができた。多くの方は報道等で初めて本校に馬術部があったことを知り、また、知っていた方々も誤報ではないかと思っただろう。馬術界においても高校から馬術を始めたメンバーでの優勝はあまり前例がなく衝撃を与えた。しかし、この奇跡の優勝の背景には部員の絶え間ない努力と経験や不利な環境に屈しない強い気持ちがあった。本件では、馬術未開拓の地で生徒達が様々な問題と直面し、活動・練習内容を工夫して、多くのことに挑戦し部活動を展開していったかを述べていきたいと思う。

2. 創部7年の歩み

平成14年	<ul style="list-style-type: none"> 高知国体終了後同好会としてスタート。 *ポニー1頭からのスタートだった。 	
平成15年	<ul style="list-style-type: none"> 本厩舎が完成し競技馬3頭が入厩、部として本格的な活動開始。 全国大会初出場（1回戦敗退） 	
平成16年	<ul style="list-style-type: none"> 国民体育大会少年初出場 全国大会2度目出場 	
平成17年	<ul style="list-style-type: none"> 現顧問小山着任 全国大会中四国大会 初優勝 全国大会3度目出場 3年生引退後1年生1名になり廃部の危機 四万十市公家行列・三原村「あげ馬」等の地域活動開始 	
平成18年	<ul style="list-style-type: none"> 馬場拡張・厩舎建設 後援会より競技馬1頭補充 	
平成19年	<ul style="list-style-type: none"> 全国大会中四国大会 優勝 全国大会4度目出場 ベスト12 個人全国大会 武内優弥 ベスト12 	
平成20年	<ul style="list-style-type: none"> 全国大会中四国大会 2連覇 個人全国大会予選 武内優弥 優勝 全国大会5度目出場 初優勝 第23回「龍馬賞」受賞（高知県で名誉ある賞） 	
平成21年	<ul style="list-style-type: none"> 個人全国大会予選 佐竹陸 優勝 個人全国大会 佐竹陸 ベスト12 	
平成22年	<ul style="list-style-type: none"> 全国大会中四国大会 優勝 全国大会6度目出場 	↓

3. クラブ構築

(1) 原点

本校馬術部は2002年に開催された高知国体をきっかけに創部されました。国体に使用された国体馬3頭を県立高校である本校に配属し立ち上げとなったのです。私が大学を卒業し幡多農業高校に着任した時は、本当にスタートをきったばかりのクラブだった。来て直ぐに思った事は「ここでは、まともな活動はできない・・・先が見えない・・・騙された。」という感じであった。運動する馬場は砂場かと思うほど狭く、その他の施設も生徒が朝から晩まで自分たちで作っている。競技会に行く際は1番近い競技場まで3時間を要する。自分の今までの競技生活で、環境面で苦労したことがなかったせいか沢山の問題点と直面し大きなショックを受けたことを覚えている。

そんな私が本気で問題点と向き合い、やって行こうと思ったきっかけは、ある生徒の強い思いを感じてのことだった。その女子生徒は先輩の3年生が引退した後、たった一人になってしまい、朝は6時から4頭の世話、放課後は夜8時過ぎまで練習と管理、肉体的にハードで尚且つ気持ちを共有できる仲間がいない彼女を可愛そうに思い、「無理をしなくていいよ。」と伝えた。するとその生徒は「私が辞めたら、この馬たちはどうなるんですか。せっかく先輩たちが頑張って作り上げてきた部を潰すわけにはいけません。だから頑張ります。」と言ってくれた。この時、自分のネガティブな考えを恥ずかしく思い、生徒の気持ちに答えられる大人・指導者にならなくてはいけないと強く感じた。彼女が少しでも早く厩舎に行くために通ってできた坂道は「エミちゃんロード」と名づけられ、今も学校で呼ばれている。現在、彼女は北海道のノーザンファームという日本一の牧場で競走馬の生産調教をおこなう仕事をしている。

(2) 継続的な部活動を目指す

①地域活動

本校馬術部が継続的に活動していくためには、まず部員確保が最優先事項となった。しかし、ただでさえマイナーなスポーツを馬術発展途上の高知県で広めるためには、普通の活動をしていただけでは何も変わらないと考えた。「馬」という今は身近にいない魅力的な動物を地域の子供から大人まで多くの人に楽しんでもらう活動を練習・競技会の合間を見て積極的におこなった。活動は以下のように実施した。

- ・三原村 つつじ祭り「あげ馬」～袴を着て直線300メートルを疾走させる。(体験乗馬)
- ・四万十市 公家行列～当時の行列を再現。その他ボランティア参加。
- ・四万十市 不破八幡大祭～河川敷からお宮に向かって馬を走らせる。(体験乗馬)
- ・宿毛市 イベントへの参加。(体験乗馬)
- ・大月 大月分校文化祭への参加。(体験乗馬)
- ・天狗高原 イベントへの参加。(体験乗馬)
- ・三原村 火祭りへの参加。(体験乗馬)
- ・室戸 流鏝馬～馬に乗って的に弓を引く
- ・四万十市 子供マラソン～河川敷でマラソンの先導を馬でする。
- ・黒潮町 菜の花祭りへの参加。(体験乗馬)
- ・その他 各地域イベントへの参加

★成果と課題

たくさんの方々に喜んでいただいたことによって、生徒たちが「頑張っってね。凄いね。」などと声をかけてもらえるようになった。このことにより、自分たちの活動の意義を感じ、自信を持ち、取り組む姿勢や練習の身の入りが良くなった。1名だった部員も5人、10人、13人と年々増加していった。入部した部員の中には体験乗馬で興味を持った子もいた。また、部員の半数は高知市、清水、大月、梶原

から親元を離れ寮生活をしながら活動している。本当に動物が好きで、やる気がある子が多いので部の活気が強まった。これも地域に喜ばれる活動が報道等を通して子供たちの目や耳に入った成果とを感じる。しかし、数多くの地域活動をするにより、競技前の十分な練習が確保できない、生徒の疲労が蓄積されるという問題がでてきた。あくまでも、高校部活動が主であることを根底に置きバランスよくやっていかなくてはならない。マイナー競技だからこそ、このような活動を続け地域から応援してもらえ環境作りをする必要があるのである。

②活動の枠を広げ可能性を広げる

本校馬術部では生徒以外の地域住民を受け入れ休日に一緒に活動している。現在の受け入れは小学生・中学生・成人女性・障害者施設の方々である。この活動は多くの人に馬術の魅力を知ってもらうだけのものではない。

小学生・中学生を対象とした少年団は、土日で実施している。乗馬クラブが全国で最も少ない高知県において経験者を確保することは大変難しい、本校では小中学生からの育成をして将来有望な選手を確保する活動をしている。小学生から馬に乗り始めた子と高校生から乗り始めた子との大きな差は「動きについていく体の柔軟性」と私は感じる。もちろん、経験数や個々の能力によっても違いは出てくるが、体が柔らかいうちに馬の反動を体感することで体のバランス・柔軟性は変わってくる。よって早い段階からの育成をおこない、部員確保・競技力向上に少しでも繋がればと、この活動を実施している。また、幼少期から動物と触れ合うことが少ない子供たちの心身の育成に良い教材であると思うので強く志願する子は今後も受け入れていく方針である。

毎週日曜日に宿毛市に住むU君（6歳 中度の知的障害・自閉症をもつ子）と四万十市に住むK君（15歳 軽度の知的障害をもつ子）が本校馬術部で乗馬を楽しんでいる。二人の保護者が「ホースセラピー」が持つ心身へのセラピー効果を知り、学校に依頼があり昨年からは実施している。本校ではアニマル・アシスティド・セラピー（AAT: animal assisted therapy）としてではなく、動物介在活動（AAA: animal assisted activities）として実施している。セラピーと付いた場合、それは専門的な知識と資格を持った医師・専門家がおこなう医療行為になってしまうからである。馬が人に与えるセラピー効果を確認しながらも、純粹に楽しんでもらうことと、安全におこなうこと、また、何かのきっかけづくりになればと思い活動している。

★成果と課題

少年団の活動では清水中学の山崎君という男の子が、昨年、日本中央競馬会競馬学校に見事合格した。この競馬学校はプロのジョッキーを育成する学校で、全国で数名しか受からない難関の学校である。彼を初めて馬に乗せた時、体のバランスと馬の反動を吸収する柔軟性に将来性を感じた。正直言うと本校の生徒として見たかったが・・・プロの目にとまり彼の夢が叶って嬉しく思う。また、今年、少年団の一期生が生徒として本校に入学してきたので、大きな期待をもっている。

動物介在活動では、二人とも毎週来ることを本当に楽しみにしているようで、保護者からも私生活に変化がでてきていると以下のように聞くことができた。

U 君保護者～日頃あまり言葉を話さず顔の表情もなかった子が、馬に乗り始めてから発する言葉が増え顔にも喜怒哀楽がでてきた。最近、家では馬の絵を描いたりして週末を楽しみにしている。馬に乗ったことによって脳に刺激が伝わり変化が表れたと私は感じています。

S 君保護者～馬に乗り始めてから色々なことに挑戦する勇気がでてきた。怖がりな子でプールの飛び込みもできなかったのですが、乗馬をして高い景色に慣れ、勇気がたせいか、飛び込めるようになった。最近は障害者の馬術全国大会に出場することを目標にしている。

現在、可能性の幅を広げるために医師・専門家と連携をとり本格的な活動を開始した。私たちには専門

的な知識がないので立証することはできないが、馬の持つ不思議な力をより多くの人に知ってもらい可能性を広げていきたい。また、この活動を学生たちが高知県農業クラブでプロジェクト発表をし、最優秀を手にすることができた。

このような活動は生徒たち自身に大きな成長を与えてくれる。小・中学生や障害を抱える人にやさしく話しかけたり、何かを教えることは彼らにとってもすばらしい経験になると思う。自分が培ったものを人に教える喜びや伝える難しさを知ることで、多くのことを考える、これは生徒に自信と考える力を与えてくれる。

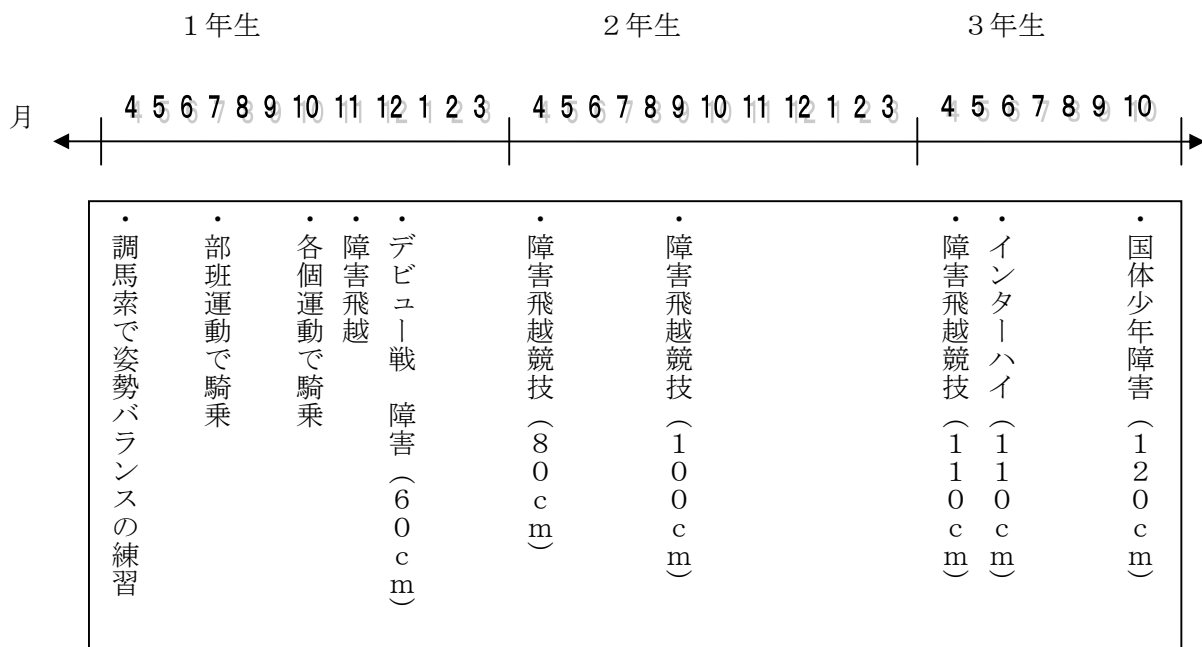
4. 指導者として

(1) 現状

全国に馬術部がある高校は約120校で、中でも強豪とされる学校は北海道・東北・九州のように昔から馬と共存してきた文化がある地域か、経験者を集め優秀な指導者を置く関東の私立高校である。中には20頭以上の乗馬を所有し、すばらしい練習設備をもっている高校もある。このような高校と全国大会で対戦するにあたり、同じ練習をしているは勝ち目が無いことは言うまでもない。本校では1年生の春から3年の夏までの800日という限られた時間の中で、全国大会で他の高校と対等に戦うために日々練習を積んでいる。

(2) 選手育成プラン

高校から初めて馬に乗る生徒たちと向き合った時、「この時期までにはこれぐらいできるようになって、その数ヶ月後にはこれぐらい」といった感じで自分がその子の上達の理想を持つことで練習メニューを組んでいくようにしている。3年間で部員全員に求める、大まかな育成プランは以下のとおりである。



(3) 自分なりの指導法と考え

①農業＝指導

農業高校の職員として農場の管理をしている私は野菜作りをしている時、ふと「農業と部活の指導は共通する所が多い」と感じることもある。

野菜作りは土づくりから始まり、種蒔きをおこない収穫までの成長の過程を人が管理していくものである。野菜の中には、ほとんど手をかけなくても育つものもあるが、大半は適切な管理をおこなわなければ売り物にすることはできない。水やり、雑草の防除、肥料が欠乏した際の追肥、病害虫への対策等、様々なことに取り組まなければ、良いものを作ることはできない。私の経験として手を加えずに失敗したことと、手を加え過ぎて失敗したことの両方がある。相手は言葉を喋ってはくれないので、毎日の観察力と的確な判断が重要となる。このような工程と結果が指導することと大変良く似ていると日頃から感じてしまう。

指導においても生徒をほったらかしにすれば活動の方向性を見失ってしまう、かといって何でもかんでも口をつけば生徒の自尊心は生まれてこない。日頃の生徒たちを良く観察し、的確な判断・発言をすることで成長に変化がでてくると信じ、常に課題に置いている。

②馬のトレーナーとして

私の役割として生徒の指導以外にも馬のトレーナーとしての仕事がある。乗馬は道具とは違い技術面とトレーニング内容が良くなければ能力を維持・向上させることは不可能である。例であげると、伝達の合図に対しての反抗、進行方向への反抗、道具への反抗、障害飛越の反抗などの行為がでてくる。馬術を初めて間もない生徒たちが状態を維持することは難しいため、馬の状態を見極め定期的に乗る必要がある。しかし、馬の状態ばかりに拘ってしまうと生徒は上達しないので兼ね合いが難しい。また、競技会などの外部に行く際は馬が興奮しコントロールが難しくなるため調整をおこなってから生徒を騎乗させるようにしている。生きている教材は状況において常に変化していくため管理が難しいのである。

生徒たちは馬をコントロールできなくなった際、何が悪かったのか、どうすれば改善できるのか、など多くの課題と直面して悩む。その課題と向き合い試行錯誤していく中で技術を磨き自信をもつことができると思う。上手くいかないことで悩むより、どうすれば改善できるようになるか考えてチャレンジするよう指導している。

③指導にあたって

私は競技力を求める上で身体能力やセンスという言葉で生徒を見ないよう自分に言い聞かせている。スポーツにおいて身体能力やセンスは重要ではあるが、指導者がそういう目で見てしまうことで生徒の上達や向上心の芽をつんでしまう可能性があるからである。レギュラー候補メンバーの強化も重要なことかもしれないが、上達が遅れている子や下級生に「自分たちは下手だからチャンスがない」と思わせる指導を心掛けている。一見、遠回りのような気もするが、部内での競争が活発になれば生徒の練習への集中力や取り組む姿勢が向上すると考えるからである。

練習時は基本的に厳しく指導している。ひとつ間違えれば命に関わるスポーツであると共に厳しさの中で生まれる集中力があると思うからである。馬にも体力・集中力の限界があるので、生徒にはダラダラした練習をおこなわず、短時間で気持ちを集中させておこなうよう指導している。また、厳しさの中で上手くいった時はおもいきり褒めてあげることにはしている。子供によっては気持ちが下がっている時に追い打ちをかけるような指導は逆効果になる場合もあるので状態を見極めて指導する必要がある。時には上手くいくような練習メニューを組み立てて、気持ちを盛り上げてあげたりもする。上手くいか

ない時期はガックリと肩を落とす生徒も技術の向上が形として表れ褒めてあげた時は何とも嬉しそうな表情をする。これが次のステップへの活力となっていくと考える。

練習以上に生徒たちに徹底して指導していることは馬の状態管理である。毎日、生徒たちの技術向上のために馬には過度の運動を要求している。足が熱をもっていれば冷水、背中や腰が凝っていればマッサージを毎日おこなっている。もし、ケアを怠れば故障し練習に使えなくなばかりでなく競技会に出場することもできなくなる。先日、練習中に1頭の練習馬が死んでしまった。死因は熱中症からくる心不全であった。今年の猛暑により体力が低下していたのも一つの原因であったと思われる。生徒たちは毎日、可愛がっていたパートナーを目の前で失ったことに大きなショックを受け全員が体調を崩すほど落ち込んでしまった。しかし、このスポーツにおいて常に起こりうると思って接しなければいけないのである。相手は言葉を話さないため観察力によって理解してあげなければいけない。この一軒で生徒たちは考え方が大きく変わり、馬を見る目も変わった。死してなお多くのことを伝えてくれた馬に感謝するばかりであった。今後このようなことが起きないように私自身も徹底してサポートしていかなくてはならない。

5. まとめ

本校馬術部員は高校生活の大半を馬と共に過ごしている。早朝の管理から始まり遅くまでの練習を休み無くおこなっている。この「馬術」というスポーツは人と生き物がコンビを組む唯一の競技である。コンビを組み一つになるためには、その馬たちと毎日を過ごしお互いを理解し合うことが必要となってくる。言葉を喋らない相手を理解するという事は本当に難しいことではあるが、知ろうとする気持ちになって毎日接していると不思議なもので色々なことが理解できてくる。筋肉の張りや肢に熱があることに気が付き治療・ケアすることも乗り役の大事な仕事である。面倒なことが多々あるが、生き物を相手にしている以上これは義務であり、できなければそれは乗る資格がないと日頃から伝えている。しかし、そんな中でも生徒たちはめげずに毎日向き合っている。これは、馬術というスポーツにそれだけの魅力があるからこそである。

土日祝日を利用しての地域活動や外部の受け入れは生徒にとって少し重荷になっているのではないかと思ってしまう。こんなことをするぐらいならもっと練習をたくさんしたいという生徒もいるかもしれない。しかし、この活動は生徒たちが今後、円滑に活動していく上で欠かせない重要なことなのである。サッカーや野球のように知名度が高いスポーツとは違いマイナー競技は周りに魅力を伝えなければ何時までも興味を持ってもらえず、遠い存在でしかなく声援・支援をいただくことはできない。部員確保・資金面・地域に根付いた部活動など、この先継続的に活動していくためには必要不可欠である。生徒たちの強固な土台となり支えてくれると信じ今後も続けていく方針である。

現在、指導にあたって5年が経とうとしているが、部活動が一番求めなければいけないことは生徒の心身の育成であり、競技結果を最優先課題に置いてはいけないとつくづく感じた。自分自身、全国優勝を経験してから、次も周りの期待に答えなければいけないと、生徒に勝つことを重視した指導をおこなっていた。結果として平成21年度は予選敗退という結果に終わった。関係者から2連覇も夢ではないメンバーが揃っていると期待された中で敗北だった。これは指導者である私がプレッシャーに押しつぶされ、知らず知らずのうちに、勝たなければいけないと生徒たちに指導した結果と思っている。この経験を機に、もう一度指導者として学習する必要があると痛感した。部活動である限り結果を求めることは重要なことだが、目標に向かって努力した生徒たちの過程を一番に評価すること、諦めずに努力することのすばらしさを伝えることが重要であると認識することができた。今後は生徒たちが人として成長できる活動内容、環境づくりに取り組み、部活動が教育課程の大きな柱であることを多くの人に理解してもらえるよう力を尽くしてゆきたいと思っている。